

# 生きぬく力

小川未明

青空文庫



「孝二、おまえでないか。」

「僕、そんなところへさわりませんよ。」

玉石の頭から、すべり落ちた青竹を、口をゆがめながらも

とへ直して、おじいさんは、四つ目垣の前に立っていました。い

たずら子がきて、抜こうとするのだと思つたのです。竹馬にす

るには、ちようど手ごろの竹だからでした。しかし、この辺の子

供には、そんな悪い子がないと考えると、植木屋の締め方が足り

なかつたのかと、しゆるなわの結び目をしらべてみたが、そ

もなさそうでした。

平常から、若いものが戦争にいつて死ぬのに、自分は、長く

生きすぎたと思っおもているおじいさんは、

「これで、七、八年ねんは持もちましよう。」と、植木屋うえきやが造つくりながら  
いったのを聞きいたとき、そのころには、孝二こうじは、中ちゆう学がくを卒そつぎ  
業ようするであろうし、自分じぶんは、生いきているかどうか、わからない  
と思おもったのでした。

「孝二こうじ、見みつけたら、しかつてくれ。」

おじいさんは、垣根かきねのきわに植うわっている、まだつぼみの堅かたい  
じんちようげの葉はについたどろを洗あらってやりました。若わかいうちは、  
なんでもぞんざいに取り扱とあつかったのが、年としをとると、どれにも自分じぶん  
と同おなじような生せい命めいがあるように思おもえて、いたわる心こころが生しょうずるの  
でした。

黒いマントを頭からかぶって、がたがたの自転車で乗った少年が走ってきました。折れたハンドルを、針金やひもで結び合わせて、巧みにあやつりながら、足には破れたくつをはいていました。息をきらしながら犬がついてきます。門のところで、自転車を降りると、前側の板べいへ寄せかけて、ポケットから、焼き芋を出して、自分は食わずに、それを犬にやりました。犬は、一口に食べると、少年の顔を見上げて尾を振っていました。少年は、マントの下に肩からかけた、新聞の束から、一枚引き抜くと、門を開けて入り口へまわらずに、竹の垣根の方へ近づきました。

ちようど、空をこうしの内からながめていた孝二は、いつも新聞をここへ入れていくのは、この子が配達するのかと思つて見ていました。しかし、子供の手は、垣根の外から伸ばしても窓の内へはとどかなかつたのです。少年は、窓の際に、自分ぐらいの子供の立っているのに気づきました。

「はだしになつて、上がつてもいい。」と、どろのついたくつをぬいで、くつ下の穴から冷たそうに指の出ている足を垣根にかけました。

「ああ、いいよ。」と、孝二は、やさしく答えたのです。そして、新聞を受け取ろうとして、マントに半分隠れた顔をのぞくと、「ああ、小泉じゃないか。」と、驚きました。

「うん。」と、少年しょうねんもはじめて気がついたらしく、にやっと笑わらつて、うなずきました。

「ああ、君きみの家いえはここか。」ともいわずに、そのままハンドルのよくきかぬ自転車じてんしゃに乗のつて、いつてしまいました。

垣根かきねのゆるむ原因げんいんはわかったが、孝二こうじは、おじいさんに、だまつていました。

算数さんすうの時間じかんでした。先生せんせいは、黒板こくばんに問題もんだいを出だされて、  
「これをまちがわずに、いちばん早く答こたえを出だしたものに、ほうびをやろう。」と、一本ほんの青色あおいろの鉛筆えんぴつを高たかく上あげて示しめされま  
した。

「先生、一人だけですか。」

「いや、いちばんおそく出したものにも、名誉のほうびをやるう。  
」と、先生は、こんどは使用されている鉛筆を高くさし上げられました。

生徒は、がやがやといいはじめた。

「名誉の鉛筆をもらいたくないものだ。」という声がありました。  
しばらくの間、教室は、しんとして、真剣な空気がみなぎりました。

「はい、先生できました。」と、ノートを持って、元氣よく教壇に進み出たものがあります。それは、孝二でした。

「早いなあ。」



「僕は、まだ二つしかできないぞ。」

そんな、ささやきが聞こえると、答案に見入っていられた先生は、

「よし。」と言って、鉛筆を孝二に与えられました。いつも、首席を争う東、小原は、まだ出ませんでした。つづいて出たのは有田です。答えは正しかったけれど、孝二に賞を奪われて、残念そうに見えました。そのうちに、いずれも出つくしました。

「最後はだれだ。」と、見まわすと、

「小泉だ。」と、笑い声が起りました。彼は、組の中でも、つねにできなかつたからです。みんなの笑いに送られて、小泉は、教壇へノートを持っていきました。

「なんだ、みんな違ちがっているではないか。」と、先生せんせいが、どなられた。彼は、耳みみのあたりまで赤あかくしました。

「おまえには、この鉛筆えんぴつだ。」と、先生せんせいは、短みじかくなつた鉛筆えんぴつを出だしかけて、なんと思おもわれたか、

「待まて……。」といつて、教員室きょういんしつへ駈かけていかれたが、やがて、手てに新あたらしい、孝二こうじに与あたえたと同じ鉛筆えんぴつを握にぎつてきて、小こ泉みづみに渡わたされました。

「いいなあ。」

「うまいことをしたなあ。」

ほうぼうからうらやましがらうような声こえが起おこつた。小泉こいずみは、うれしそうに、またすまなさそうに、自分じぶんの席せきへもどつたのである。

ります。

運動場へ出るとき、廊下で、だれか、

「小泉の家は、貧乏だから先生がやったんだよ。」と、蔭

口をしているのを聞くと、

「先生がやさしいんだ。」と、孝二は腹立たしげに打ち消しました。

せみの声もしたし、運動場には、まだ烈しい日の光が照りつけていました。

「ドッジボールの金をもらうよ。」

校舎の日蔭のところに立つて、東が、一人一人から金を受け取っていました。一人が、十銭以上の寄付をすれば、その金で

求めたドッジボールの遊戯に加わることができたのでした。

「小泉くん、君持ってきたの。」と、孝二が、そばへ寄って問  
 いました。小泉は頭を振りました。

「じゃ、僕のと二人分にしておくからね。」

孝二は、二十銭出そうと持ってきたのを、小泉と二人の分  
 して出しました。これで、小泉もこの遊戯に加わることができ  
 たのです。

ついこのあいだまで聞こえていた、あぶらぜみの声がしなくな  
 ったと思うと、秋がきました。そして、今日は、一同の待ちに待  
 った遠足の日であります。

荒れ果てた寺の境内で、孝二は、ひとり松の根に腰を下ろして、

茫然ぼうぜんとしていました。

「君きみ、食たべない。」と、ふいにキヤラメルはこの箱はこをひぎの上うえへ置おいたものがあります。見み上あげると、小泉こいずみでした。

「どうして、こんなことをするんだい。」と、孝二こうじは、不思議ふしぎに思おもいました。

「いつか、ドツジボールのお金かねを出だしてもらったから。」

「えっ。」

「いつか、ドツジボールのお金かねを出だしてもらったろう。」

「そんなこと、いいんだよ。君きみ、お食たべよ。」と、孝二こうじは、それを返かえそうとすると、

「僕ぼく、君きみの分ぶんとして買かつてきたんだもの。」と、小泉こいずみがいま

した。孝二は、これを聞くと、目がしらが熱くなって、

「ありがとう。」と、礼をいって、自分の持つてきたものを出して、二人は、並んで話しながら、お菓子や、果物を食べたのでした。

「まだ、新聞配達をやっているの。このごろちつとも見ないね。」

「ちがった方面を受け持ったのだ。」

「休みのとき、遊びにおいでよ。」

「だって、恥ずかしいもの。」

「ちつとも恥ずかしいことなんかないさ。僕のお母さんも、君を偉いといつて、感心しているよ。」

「そうかい、こんどいくよ。」

「卒業そつぎようしたら、どうするんだい。」

「お母さんかあは、上の学校うえがっこうへはやれぬから、家の手助けいえてだすをしるとうののだ。」

「君のお母さんきみかあは、いいお母さんだろう。」

「僕ぼくが、勉強べんきようができなくても、しからないよ。」

「先生せんせいも、これからの子供こどもは、第一だいいちが健康けんこうで、つぎは、正しょう直じきに働くことだ。それがすなわちお国くにのためにつくすことにな

るとおっしゃったろう。僕ぼくなどより、君きみのほうがよっぽど偉えらいんだ。いまからでさえ働はたらいているのだもの。」と、孝二こうじは、ややもすると黙だまってしまう友ともだちをばげました。

ちようど、このとき、あちらで、集しゅうごう合ごうの笛ふえが鳴なりました。

「東あずまさんというのは、たいそうおできになるのだね。」と、父ふけい

兄かい会かいから帰かえつていらしたお母かあさんが、いわれました。

「級きゅう長ちようだ。」と、孝こうじ二には、答こたえました。

「どうりで、お母かあさんが、自じ慢まんしていらした。先せん生せいも、おほめ

になっていられた。府ふりつ立だつだつて、どこだつてだいじようぶでしよ

うといつていられたから。そして、有ありた田たさんという子こもおできに

なるようだね。」

「東あずま、有ありた田た、小おぼら原ら、三ぼ羽はがらすだよ。みんなお母かあさんがいつてい

たの。」



「ふとつたお母さんは、有田さんのお母さんでしよう。」

「眼鏡をかけているのが、有田くんのお母さん、背の低いちぢれ髪のが、東くんのお母さん、ふとつているのは、小原くんのお母さんさ。あの三人は、いつも寄れば、自分の子供の自慢話をしているのさ。」と、孝二が、冷笑しました。

「自慢のされるようなお子さんを持つて、どんなにお母さんたちは、うれしいかしれません。そういえば、その三人のお母さんたちは、よく知り合っているように話をしていられました。おまえも、勉強すれば、もつとできるのだがと先生がいつていらしたよ。」

「先生は、健康第一、勉強第二と、いつていくくせにな

あ。」

「健康けんこうと怠なまけることとは違ちがいます。ああいうところへ出でると、できない子供こどものお母かあさんは、気きの毒どくですよ。先せん生せいの前まえで、頭あたまばかり下さげていなければなりません。」と、お母かあさんが、いわれました。

「そんなお母かあさんあつて。」

「どこのお母かあさんか知しらないが、先せん生せいの前まえでペコペコ頭あたまを下さげていた人ひとがありました。」

「どんなお母かあさん。」

「働はたらいている方かたのように、みすばらしいふうをしていましたが：

…。」

これを聞くと、孝二の目は、かがやきました。

「それは、小泉のお母さんだ。よいとまけをやつて、小泉と妹と三人で暮らしている、貧乏な家なんだよ。」

「それで、私が、家にいませんからと、先生にいつていらした……。」

「二、三年前にお父さんが死んだのだそうだ。しかし、やさしい、いいお母さんらしいのだよ。」

五、六年は、たちまちに過ぎてしまいました。植木屋が、七、八年は持つといった竹垣も、この秋には新しくしなければなりません。けれど、おじいさんも達者であれば、孝二は、

じきに中<sup>ちゆうがく</sup>学<sup>がく</sup>を卒<sup>そつぎよう</sup>業<sup>ぎよう</sup>するのでした。ある日<sup>ひ</sup>、同窓<sup>どうそうかい</sup>会<sup>かい</sup>があつて、ひさしぶりで母校<sup>ぼこう</sup>に集<sup>あつ</sup>まり、なつかしい先生<sup>せんせい</sup>を取り巻<sup>ま</sup>いたのですが、顔<sup>かお</sup>を合<sup>あ</sup>わせたのは、わずか十五、六人<sup>にん</sup>に過ぎなかつたばかりでなく、東<sup>あずま</sup>も、小原<sup>おぼら</sup>も、有田<sup>ありた</sup>も、見<sup>み</sup>えないのが寂<sup>さび</sup>しかつたのでした。この日<sup>ひ</sup>、孝二<sup>こうじ</sup>の立<sup>た</sup>つていったことは、つぎのようなものでありました。

「私<sup>わたし</sup>は、生きぬく力<sup>ちから</sup>というものを感じ<sup>かん</sup>ました。それは、学<sup>がっこう</sup>校<sup>こう</sup>に  
 いる時分<sup>じぶん</sup>、先生<sup>せんせい</sup>からも聞<sup>き</sup>いた、健<sup>けん</sup>康<sup>こう</sup>で、まじめに働<sup>はたら</sup>くという  
 ことですが、同窓<sup>どうそう</sup>の小泉<sup>こいずみ</sup>くんについて、最<sup>さい</sup>近<sup>きん</sup>私<sup>わたし</sup>は胸<sup>むね</sup>を打<sup>う</sup>た  
 れました。諸<sup>しよ</sup>君<sup>くん</sup>の知<sup>し</sup>られるごとく、小泉<sup>こいずみ</sup>くんは、学<sup>がっこう</sup>校<sup>こう</sup>にい  
 る時分<sup>じぶん</sup>から働<sup>はたら</sup>いていたのです。卒<sup>そつぎよう</sup>業<sup>ぎよう</sup>後<sup>ご</sup>は、上<sup>うえ</sup>の学<sup>がっこう</sup>校<sup>こう</sup>へはいか

ずはたらに働はたらいていたようですが、なにをしていたか知しりません。三ねん年ねんばかり前まえ、一ど度途とちゆう中ちゆうであつたときは、小僧こぞうさんのようなふうをしていました。

『いそがしいかね。』と、聞きくと、

『うん。』といいました。

『体からだを大だい事じにして、働はたらきたまえ。』というと、笑わらつて、別わかれてしまつたのでした。ところがこれは、このあいだのことです。

それは日にち曜ようの午ご前ぜんでした。天てん気きがいいので、往おう来らいは、いつになく人ひと出でがおおおく、カメらを下さげて出でかける青せい年ねんなどを見み受うけました。このとき、チリン、チリンという鈴すずの音ねがしました。それは、魚さかなの骨ほねや、ご飯はんの残のこりなどを、毎まい朝あさ集あつめに車くるまを引ひいてく

る、それなのです。なんの気なしに振り向くと、その男が、小泉くんなのです。巻きゲートルをして、地下足袋をはいて、黒い帽子を被っていました。小泉くんは、ほかへ気をとられて、僕に気づきませんでした。僕は、よほど声をかけようかと思つたが、自分がなんだかいくじのない人間のような気がしてやめました。私は、真に働くものの尊さを感じたのであります。同じ年ごろの青年が遊び歩いているのに、それをうらやむ色もなく、また自分のようすを恥ずかしいなどと考えず、仕事に対して真剣なのになうたれました。東くん、小原くん、有田くん、この三人は、我が組の三羽がらすとして知られた秀才でありました。しかし、この三人は、あまり勉強が強が過ぎて、三人とも死んで

しまつたのです。死んでしまつては、なんのお国の役にもたちま  
 せん。また、小泉くんのお母さんは、競争心なんか無い人  
 で、小泉くんに無理に勉強をさせなかつたのもいいことだ  
 と、私は思いました。先生は、第一が健康で、つぎは、正  
 直で、まじめであれとつねに私たちにいわれました。皆さんも  
 記憶があるでしょう。いつであつたか、先生は、算数の時間  
 に、いちばん早くできたものと、いちばんおくれたものに鉛筆  
 をくださったことがあります。だれも、おくれた名誉の鉛筆を  
 もらいたく無いと思ひました。そのとき、小泉は、いちばん最  
 後で、しかもまちがつた答えを先生のところへ持つていつたの  
 であります。笑つたものもあつたが、私は、小泉くんは正

直きだと思おもいました。チリンチリンの車くるまを引ひく小泉こいずみくんを見みたとき、私わたしは、その正しょうじき直ちさをふたたび感かんじました。それはぐんと私わたしの胸むねをつきました。そうだ、どんな苦くるしいことであっても、私わたしたちは、生きぬかなければならぬのだ。生きぬくことがすなわち、お国くにのためにつくすことだと感かんじたのであります。「孝こうじ二じがこういったので、小泉こいずみの生せい活かつが、はじめてみんなにもわかりました。この日ひ、小泉こいずみは、同窓会どうそうかいにはきませんでした。」

この話はなしを聞きかれた、先せん生せいの目めには、五、六年ねんまえ前のいじらしい彼かれの姿すがたを思おもい出だしてか、涙なみだが光ひかっていました。







# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「生きぬく力」正芽社

1941（昭和16）年11月

初出：「新児童文化 第1冊」

1940（昭和15）年12月

※表題は底本では、「生《い》きぬく力《ちから》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 生きぬく力

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>